

12月6日
帰国生日本入試

2024年度
入学試験問題
国語

【注意事項】

- 試験時間は50分です。
- 問題は1ページから17ページまであります。
- 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 問題用紙と解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。
- 記述は句読点や記号も字数に数えます。

受験 番号								氏名	
----------	--	--	--	--	--	--	--	----	--

宝仙学園高等学校共学部 理数インター

一

次の各文の傍線部のカタカナの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- ① 初出場で初優勝のイギョウを成し遂げた。
- ② 貿易交渉に他国がカイニユウする。
- ③ 彼のケンジツな仕事ぶりには定評がある。
- ④ アザヤかな色づかい。
- ⑤ 仏教行事がオゴソカに行われる。

二

次の各文の傍線部に当たる漢字の読みがなをひらがなで書け。

- ① 研究のために動物の行動を把握する。
- ② 長らく続いた怠惰な生活を改める。
- ③ 体力の限界に挑む。
- ④ 旅行先で秋の味覚を満喫する。
- ⑤ ここは、ワサビ栽培発祥の地だ。

三

次の文章を読み、あとの問いに答えよ。

私たちの体は、およそ60兆個の細胞から成り立っており、一つの細胞はおよそ1000兆個の原子で形成されていますから、一人の人間は全部で6の後ろに0が28個もつく巨大な数の原子から成り立っています。その原子は、生まれたときからずっと変わらずに同じ原子のままではなく、内臓や器官ごとにそれぞれ継続時間は異なっているものの、ある一定の期間が経つと入れ替っています。人間の体は新陳代謝をしているのです。この新陳代謝は、爪や髪の毛が伸びては切っているし、体を洗えば垢^{あか}が洗い落とされることで、私たちも日ごろ実感していると思います。同じように、胃や腸の細胞も血液も全体の量は変わりませんが、それらを構成する原子は入れ替っているのです。

かつては、脳や心臓の原子は不変だと思われていましたが、やはり時間とともに新しい原子へと入れ替わっていることが確かめられました。原子そのものは古びたりしないのですが、細胞として多数の原子が協調して長時間働くためには、時々部品である原子を入れ替える必要があるのです。細胞の原子を入れ替えても、細胞そのものは同じ働きを続けているのです。

A 脳細胞には記憶という重要な働きがありますが、原子が入れ替っても記憶は変化なく継続されています。記憶は原子一個一個に記されているのではなく、原子の集合体としての形態や集団的運動状態などによって記憶されているようで、^① 実に素晴らしい仕組みとなっていると思わざるを得ません。

細胞の原子が入れ替るきっかけは何だと思えますか？ それは「アポトーシス」と呼ばれる現象です。細胞を構成している原子がある一定の時間が経つと、「交代」という指令が遺伝子から発せられるのです。

B、遺伝子には各原子が働く期間の寿命が書き込まれており、それに応じて「細胞死」の指令が出されると原子は働きを止め、死を迎えて体外に排出されるというわけです。むろん、同時に血液から新しく原子が取り込まれ、原子のバトンタッチによって細胞に組み立てられ働きが継続されるのです。このような仕組みとなっているため、アポトーシスは「プログラムされた細胞死」と定義されています。

傷を負って細胞が死ぬのは「ネクローシス（壊死^{えし}）」で古くから知られていましたが、新しい細胞死の形態として1972年になって気づかれたのがアポトーシスでした。語源はギリシャ語で「枯れ葉などが木から」落ちる」という意味があります。まさしく秋になって木の葉が枯れて落ちるのもアポトーシスのためです。日光が弱くなると木の葉で行われる光合成の量が減り、呼吸や水の蒸発などのために使うエネルギーの方が多くなってしまふので、**C** 葉を落とす方が木にとってはエネルギーの節約になりますね。つまり、アポトーシスは生物が生き残るための仕組みであり、細胞「死」があるからこそ個体の「生」があると言えるでしょう。反対にガン細胞は遺伝子から交代するよう指令が出ても拒否して生き続ける特異な細胞で、その結果として個体が死んでしまうわけで、^② 「死」の拒否は「生」を殺すのです。

すべての生命体はアポトーシスで原子が入れ替わり、細胞死した原子はバラバラになって体外に排出されますから、広く水中や空气中に広がってきます。また、植物が死ぬと枯れ、野生動物が死ぬと蛆^{うじ}によって掃除され、蛆はそのまま寿命を終えるとバラバラに分解されます。人間は死を迎えて

焼かれると、体を構成していた原子は気体（ガス）となって空間に飛び散っていくでしょう。

つまり、死を迎えた生物体の細胞は最終的に原子や分子にまで分解され、広く水中や空中に漂い、それらはやがて雨に打たれて川から海に流れ込むことになります。海の水は太陽の熱で蒸発し、それと一緒に原子や分子も気体となって空中に広がり、やがて雨に打たれて海に戻り、また蒸発して気体になり、というような循環を繰り返すうちに、満遍なく海水中にかき混ぜられるでしょう。むろん、一部は植物に吸収されて葉や実になり、それらが動物に食べられて動物の体になり、その後のアポトーシスで原子や分子となって再び空中に放出されることもあります。

私たちの体を作っていた原子が対外に放出されると、空中と水中を循環するというような放浪の旅をした後、誰かの体に入って内臓になったり、脳細胞になったりするでしょう。そしてまた *1はいせつ 排泄され、空中を漂って水に溶け、また誰かの体に入って内臓になり……というふうに、原子はさまざまに形を変えながら人間（のみならず、新陳代謝する生物体）を遍歴している可能性があります。生きとし生けるものすべては、このような原子の連鎖によって繋がつながっていると言つてよさそうです。そんなことは滅多めったにない、と思うかもしれないので、簡単に計算しておきましょう。

こんな問題を考えてみましょう。私たちの体を構成する原子の数は、6の後ろに0が28個もくついた数であると言いました。私の母は死んで50年になりますが、死体は焼かれ母の体を作っていた原子が空気中に散らばり、雨に打たれて海に流れ込み、その後の循環過程の結果満遍なくかき混ぜられたとしましょう。そうして、海の水を200CCの大きさのコップ一杯を汲みだしたとき、母の体にあった原子は何個含まれているかという問題です。海は広大だから、ほとんどゼロだと思ってしまうでしょう。しかし、驚くなかれ860万個も母であった原子が入っているのです。こうして計算してみると、私たちを作っていた原子が多数個、次々と人々に受け継がれていると言つても過言ではないのです。

コップ一杯の水には母の体の原子だけでなく、その前に亡くなった父の、その後に亡くなった兄の、さらに伯父さんや叔母さんや私たちの先祖すべての人を作っていた原子も含まれているでしょう。ホモサピエンスがほぼ20万年前に現れてから現在まで、およそ7000世代の人類が登場してきました（かつての寿命は短かったので1世代を30年とし、20万年を30年で割ったおおよその数の7000が大体の世代数と考えてよいと思います）。その間の人類すべての原子も入っていることでしょう。原子には印がついているわけではありませんから、どの原子を、誰から受け継いできたと言えないのですが、^③ 私たちは連鎖と続く原子の連鎖の中に生きているのです。

人類を原子のレベルで見ればすべて共通の原子の働きで生きています。だから、私たちが原子の連鎖の中で生きていることから予言できることは、みんな対等であり、^④ 「人類はみな兄弟」と言つても差し支えないということです。肌の色や頭髮や背の高さや頭の形など、人類の生物学的な特徴で「人種」分けをすることがありますが、それは意味がないということがわかっています。人類の見かけの姿の差は、先祖が生まれ育った地域の風土を反映しているだけで、人体そのものの原子による基本構造の骨格は変わらないのです。だから、人種という概念は存在せず、人類は本質的に一種類なのです。そのことはDNA解析からもわかっていることで、人類には優劣はないという当たり前の、しかしとても重要な事実を原子の連鎖が予言していると言えるでしょう。

(注) *1 排泄……動物が、体内で作られた不要物や有害な物質を体外に出すこと。

問一

A

C

に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア A ㉡たとえば B ㉡しかし C ㉡すると
イ A ㉡もちろん B ㉡だから C ㉡むしろ
ウ A ㉡たとえば B ㉡つまり C ㉡むしろ
エ A ㉡もちろん B ㉡ただし C ㉡そこで

問二

傍線部①「実に素晴らしい仕組みとなっている」とあるが、筆者はどのような点を指してそのように述べているのか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 人間の臓器を構成する原子は、臓器によって継続時間が異なることで決して古びることはないという点。
イ かつては不変だと思われていた脳や心臓の原子が、新しい原子に入れ替わることが解明されたという点。
ウ 人体を構成する巨大な数の細胞は、いくら原子が古びても原子の全体量が減少することはないという点。
エ 記憶という働きは、原子が入れ替わっても細胞が集団として働き続けることで維持されているという点。

問三

傍線部②「『死』の拒否は『生』を殺す」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 細胞の原子が生き続けてしまい新陳代謝が起こらないと、細胞全体の働きが継続できなくなってしまうということ。
イ 傷を負った細胞が再生することで細胞そのものが古びることはなくても、個体は次第に衰えて死を迎えるということ。
ウ 原子のバトンタッチによって個体が永遠に生き続けるようになることが、アポトーシスの仕組みであるということ。
エ ガン細胞のような特異な細胞が体内で増殖すると、結果的にネクロシスの仕組みが正常に働かなくなるということ。

問四 傍線部③「私たちは連綿と続く原子の連鎖の中に生きているのです」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 人体を構成していた原子が自然界を放浪し循環しているとすると、どの原子がだれから受け継がれたかの特定はできないということ。
- イ 死を迎えた生物体の細胞が原子に分解されると、空中と水中を循環して人体を遍歴した後、再び空中に放出されて放浪するということ。
- ウ 人体には先祖代々の原子が入っているのであり、それらも含め多数の原子が次々と人々に受け継がれて途切れることはないということ。
- エ 人類の歴史上、7000の世代が存在したと考えられるが、どの世代においても原子は同一の働きを保って生き続けているということ。

問五 傍線部④「『人類はみな兄弟』と言っても差し支えない」とあるが、ここで筆者はどのようなことを言おうとしているのか。五十字程度で説明せよ。

問六 問題文の論の進め方の特色を説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 細胞や原子といった微細な視点からの専門的な解説に始まり、人種によって体の構造にどのような違いがあるかという見地から人類の歴史をたどり直そうとしている。
- イ 読者の視点に立った具体例を用いて生命の難解なしくみを解説する助けとしながら、さまざまな生命体の中でも特異な進化をとげている人体の神秘を解き明かしている。
- ウ 読者に問いを投げかけた上でその答えを科学的なデータを用いて導き出しながら、断定を避ける言い方を多用することで答えが一つに定まらないように工夫している。
- エ 体細胞の働きをめぐって身近な具体例を通してわかりやすく述べ進めるとともに、学術用語や数値データを用いて論理を裏づけることで、説得力を増そうとしている。

問題 四 は次のページから始まります。

四

次の文章を読み、あとの問いに答えよ。

両親の離婚を経験した中学二年生の井上音和は、二学期に都心の学校から郊外の中学に転校し、写真の事業に失敗した父とアパートで二人暮らしをすることになった。転校先の学校で、音和は顧問の河井の誘いで新聞部に加わるのだが、仲間の部員の話から、父が街頭でチラシ配りをしていることを知った。音和は、父が伯父の仕事の下働きをしているのかと思い、動揺するのだった。

父がでかけてしばらくのち、湿った風が吹きはじめた。音和は窓をしめながら、学校のある台地の上空に、重々しく雲がたれこめているのを目にした。厚い雲のながときおり閃くのは、そこに雷雲があるからだだった。

部屋のなかには、まだ手さげ袋がひとつのこっていた。印刷所から配達されたままの*¹ クラフト紙につつまれた束がはいっている。音和はそのなかからひと束をとりだしてほどこき、父がしていたように、*² 投げこみのサイズに折たたんだ。やはり、以前に目にしたものとはちがう仕様だ。

記念写真を特製のフレーム仕上げるサービストキ、と書いてある。赤ん坊の写真ならばスワンやカナリアなどの鳥とりボンをあしらったもの、七五三の写真には、金や銀の縁かざりのついた胡蝶やクジャクのもようがつく。古風にかたよらず子どもじみでもない絵柄が選ばれ、それなりに洗練されているのは、音和にとつて意外だった。^①

彼もまた、伯父の商売の俗っぽさをひそかに批判していたのだが、本館のほかにスタジオを新しくかまえるほど繁盛しているということは、それなりに人の心をつかんでいるのだ。おかげで父も、失業を免れた。^{まぬか}

近隣の家で雨戸をたてる音がひびく。雨がふりだしたのだ。まもなく、激しい雨音に変わった。音和は父の自転車がもどつてこないかと耳をそばだてたが、雨音にかき消されてなにも聞こえない。

三百メートルほどさきの神社の参道入り口に、自動販売機といっしょに公衆電話がある。音和はそれを思いだした。午後九時半をまわったばかりだったが、隣接する大屋の家はすでにひっそりとして、電話をかってほしいと云うのは気がひけた。音和は公衆電話を目ざして、雨のなかを走りだした。急ぐために、傘はささずに手にしたまま走った。

家をでたときは、河井に電話をかけるつもりでいた。だが、泣きごとを云うために番号を聞きだしたのではない。背なかを雨にうたれるうち、音^②和はなにかもつと強い自分でありたいと思いはじめた。強情で生意気な点では自覚のある音和だったが、それはたとえば厚く積もった堆積物のようなもので、いくらでも流動する。それらがぜんぶとりのぞかれたときに、のこるものが強くなければ意味がない。

夜だろうと雨だろうと、飲まず食わずで巢を目ざすという鳩のことが思いだされた。休めば危険がます彼らにとつて、翔びつづけることが身を守るもつとも有効な手段でもあるのだ。感情的なふるまいなど、はいりこむ余地がないほどきびしい現実に立ちむかっている。

音和は、やみくもに走るのをやめ、傘をさして歩きだした。神社の参道前へさしかかったとき、前方に自転車のライトが見えた。街灯がそのあたりを照らしている。だから、たがいに相手がだれかをみとめた。

「……どこへいく？」

雨にぬれた父の姿は、音和に^{*3}梅雨の晩のことを思いださせた。ただ、今の父には崖^{がけ}つぷちを歩いているような気配はなかった。ひらきなおったようすで、なかば平然と雨にぬれそぼっている。

「伯父さんに電話しようと思って、」

音和は気負いながらそう云った。河井に泣きごとを云わないときめたあとで、彼が決心したのは伯父に直接抗議することだった。

「なんの用で？」

「だってこんなのはフェアじゃない。おとうさんは、もっとまともな仕事ができるのに、それをさせないのはまちがっている。駅まえでのチラシ配りや、郵便受けへの投げこみなら、ぼくにもできる。……だから、ぼくがやると云おうとしたんだ。おとうさんには、ちゃんとした仕事をさせてほしい。」伯父に電話しようと決意したときの音和は、父への不当なあつかいに抗議することしか考えていなかった。自分にも何かできるとは、思っていなかった。雨にぬれながらも、音和をまっすぐに見つめる父の姿が、彼にそれを云わせたのだ。

A。それを見て、音和の緊張がゆるんだ。こらえていた思いが涙になる。いつのまにか傘を持つ手をおろしていた音和は、ふたたび雨にぬれていた。雨脚がはげしくなる。だが、その雨はこちよかった。

音和の手から傘をとった父は、それを息子にさしかけた。自転車の前かこの手さげ袋は、すっかり雨にぬれている。簡単な防水加工をしてあるが、雨はそれ以上にふっていた。

「それ、ぬらしたらまずいんじゃない？」

音和は手のひらでほほを拭^{ぬぐ}いながら父にたずねた。

「たぶん、」

父は笑顔でこたえ、帰ろう、と音和をうながした。ふたりは雨のなかをアパートへもどり、ゆずりあったあけく音和が先に二度目のシャワーをあびに浴室へはいった。彼につづいて父がはいり、ようやく遅い食卓についた。まだ十一時にはならない。だが、この時間大家宅は寝静まって、気配もなかった。雨音が弱まると、とたんに虫の鳴く声があった。

音和は、先ほど折りかけていたチラシを放りだしたままなのに気づき、あわてて片づけた。こっそり手つだおうとしていたのにきまりが悪かった。

「心配をかけて、すまなかった。でも、私は平気だから。おまえもよいいなことで気をもまなくていい。自分のことに集中してろ。これでも、おまえが思っているよりはずっとタフなんだよ。とくに伯父さんにたいしては。」

いつもの父の意地がでる。

「そういう態度だから反感を買うんじゃないの？」

「おとなしく頭をさげれば、よけいにたたかれるだけさ。……子どものころから、そういう兄だった。」

「憎しみあつてるの？」

B。

「ただの兄弟ゲンカだよ。いまは借金があるから、ほんとうのケンカはそれを返してからだ。そう思って辛抱してる。それに、いつまでも兄の世話にはならないさ。」

音和はようやく、自分が考えるほど父はこのチラシ配りを深刻に受けとめていないのだと安堵した。

「可愛げのない弟だね。」

「おたがいさまだ。六歳ちがいの弟に、バスでも新幹線でも飛行機でも、窓側の席を一度もゆずったことのない兄だよ。われわれの亡き父親は、……音和が好きだったおじいちゃんは、兄にも私にも小学生のときからひとつづつカメラを持たせてくれた。だが、旅行先からもどってフィルムを現像にだすと、私のはきまって感光していて、プリントができないんだ。寝ているあいだに、兄がカメラの裏布タをあげるんだよ。証拠はなかったが、ほかに理由は考えられない。そういう兄と、どうして仲良くなれると思う？」

「それもゆがんだ愛情表現なのかも。」

「わかったふうな口をきくなよ。その手の知らなくてもいい俗な云い草を、いったいどこから仕入れてくるんだ？」

おとうさんの書棚にあったミステリー、とは答えず、音和はべつのことを口にした。

「ぼくにもきょうだいがいれば、おとうさんの気持ちも、もうすこしわかったと思うけど。」

「……もし弟か妹がいて、彼か彼女がおかあさんと暮らしたいと云ったら、おまえも向こうへいったんだろうな。」

「そのほうがよかった？」

「私が訊いてるんだよ。父親の仕事が自分の生活圏でのチラシ配りだなんて、がっかりだろう？」

「……ぼくは、」

この父を好きだと、いまなら迷いなく答えられる。自分たちの都合だけで離婚話を持ちだした両親に腹をたて、好きでもない父といっしょに暮らすのだと思ひもしたし、態度にもあらわした音和だったが、かつてのせいたくさのかけらもないいまの暮らしが、さほど苦にならないのは、身近になった父が、ありのままの姿を示してくれるからだだった。

「……いまのおとうさんのほうが……好きだから。かっこうつけているときより、ずっといいよ。」

父は箸をおき、ありがとう、と頭をさげた。そのとたん、音和の目に涙があふれた。父はタオルをさしだした。

「チラシ配りは、私が志願してはじめたことなんだよ。サービスでつけているフレームのデザインを変えたほうがいいと提案したら、伯父さんはサービスなんだからデザインに凝る必要はないと云いつつも、企画は承認してくれた。そのかわり、効果があがったとはつきり数字に出ないときは、新しいフレームとチラシの製作費を給料からさしひくと云われた。」

「筋は通ってるね、」

C。「なまいき云ってないで、もう寝ろ。」

(長野まゆみ『野川』一部改変)

(注) *1 クラフト紙……包装用の褐色で丈夫な紙。

*2 投げこみのサイズ……郵便受けに投げこむのに適した大きさのこと。

*3 梅雨の晩のこと……音和が転校する前の六月の雨の夜、雨に打たれた父とマンションのホールで出会ったできごとを指す。この時音和は、事業の資金繰りに追われる父の姿を「崖っぷちを歩いている」ようだと感じていた。

問一 波線部 a「やみくもに走る」・b「俗な云い草」のここでの意味として最も適当なものを次からそれぞれ選び、記号で答えよ。

a 「やみくもに走る」

- ア 目的地に向かって急いで走る イ 雨にぬれるのも構わずに走る
ウ くらやみのなかを全力で走る エ あせりを感じて休まずに走る

b 「俗な云い草」

- ア 気のきいた言い方 イ ひねくれた物の見方 ウ 子どもじみた弁明 エ ありふれた言い回し

問二 傍線部①「音和にとって意外だった」とあるが、それはなぜか。その理由を説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 伯父の会社の特製フレームが案外ありきたりではなく、細かいところまで整ったものであることがわかったから。
- イ 伯父の経営する写真館が、商売の周到な工夫によって客の心をつかみ、とても繁盛していることがわかったから。
- ウ 父の配っている街頭チラシが、伯父の写真館の順調な経営に貢献するほど重要なものであることがわかったから。
- エ 記念写真のサービスは、父らしいアイデアが生かされている、たいへん優れたものであることがわかったから。

問三 傍線部②「音和はなにかもつと強い自分でありたいと思いはじめた」とあるが、「もつと強い自分」とはどんな自分か。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア どつしりと腰を据えながら、人の意見を聞き入れられる自分。
- イ 自分の意志を強く持って、何があろうとも意見を変えない自分。
- ウ ありのままの姿でいながら、感情的に動じることのない自分。
- エ だれとでも遠慮せずに話して、本当の気持ちを伝えられる自分。

問四 傍線部③「雨にぬれながらも、音和をまっすぐに見つめる父の姿が、彼にそれを云わせたのだ」とあるが、このときの音和の心情を六十字前後で説明せよ。

問五 文中の A } C に、話の流れに合うように次の①～③を補ったとき、組み合わせとして最も適当なものをあとから選び、記号で答えよ。

- ① 「父は軽快な笑い声をたてた」
- ② 「父は小さく笑い声をたてた」
- ③ 「父は笑みを浮かべた」

- ア A Ⅱ ② B Ⅱ ① C Ⅱ ③
 イ A Ⅱ ② B Ⅱ ③ C Ⅱ ①
 ウ A Ⅱ ① B Ⅱ ② C Ⅱ ③
 エ A Ⅱ ③ B Ⅱ ② C Ⅱ ①

問六 傍線部④「そのとたん、音和の目に涙があふれた」とあるが、この時の音和の気持ちを説明したものとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 苦境を耐える父に対してなまじきな態度をとっていたことにやつと気づいて、反省する気持ち。
 イ かざらない父の本来の姿にふれて、自分も素直な思いを父に伝えられたことに安堵する^{あんど}気持ち。
 ウ 伯父と父との不和が自分の誤解だったことがわかり、わだかまりが解けて父に甘えたい気持ち。
 エ 父がチラシ配りまでして自分との生活を支えようとしていることを知り、気の毒に思う気持ち。

問七 この小説の内容や表現についての説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 自転車の音、隣家の物音、虫の鳴く声と、音和が耳を澄ませる気配が繰り返されることから、彼が自分を取り巻く現実^{現実}に敏感になっていることが暗示されている。
 イ 視覚や聴覚によってあざやかに捉えられた情景が比喻としてはたらくことによって、大人の世界の複雑な事情に巻きこまれた音和の傷つきやすい内面が描かれている。
 ウ 父と思春期の息子とが互いの本音を探り合うような会話がリアルな話し言葉によって表され、現代社会における家族のあり方という主題が浮き彫りになっている。
 エ 小さな行き違いから気まづくなっていた父と子がやがて解^{わか}り合い、心を通わせていく過程が、父子の双方の視点を行き来するような手法によって丁寧に描かれている。

五

次の文章を読み、あとの問いに答えよ。

牛車^{ぎつしゃ}とは、牛に牽^ひかせた移動用の車である。本体は車輪と荷台、そして人が乗る屋形部分からなり、これに轆^{ながえ}と呼ばれるコの字型の柄を付けて、牛に牽かせた。都大路を牛車でお出かけ、というのは平安京だけの風景だったらしい。奈良時代、平城京においてはまだ乗り物用の牛車は発達せず、平安遷都後に貴族たちの暮らしが大きく変わる中で使われるようになったとされるからだ。

(中略)

牛車に乗ることができる人間は限られており、庶民は乗ることを許されなかった。『枕草子』にはしばしば牛車が登場するが、清少納言は、私的には貴族の端くれの娘として、公的には^{*1}中宮の女房として牛車に乗ることができたのだった。牛車に乗ることは彼女の日常といってよかつただろうが、それでも、牛車^①から見る風景には心躍るものがあつた。

古文1

月のいと明^あかきに、川をわたれば、牛の歩むままに、水晶などのわたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。〔『枕草子』「月のいと明かきに」〕

月が皎々^{こうこう}と照るなかで川をわたれば、牛の歩くにつれ水晶などがわれていくように水が散っていく。それがとても素敵。

古文2

卯月^{うづき}のつごもり方に、初瀬に詣でて、淀^{よど}の渡りといふものをせしかば、舟に車をかきすゑて行くに、^{*2}菖蒲^{しょうぶ}、菰^{こも}などの末短く見えしを、取らせたれば、いと長かりけり。菰積^{こもづみ}みたる舟のありくこそ、いみじうをかしかりしか。〔『枕草子』「卯月のつごもり方に」〕

四月の末頃に初瀬寺に詣でて、名に聞く「淀の舟渡り」というものをした。乗って来た牛車を舟の上に持ち上げて、乗せて行くのだ。川面から顔を覗^{のぞ}かせる菖蒲や菰などが、上からは短く見えたとともに長かつたけ。菰を積んだ舟が行きかうのが本当に素敵だった。

浅い川は牛車のまま渡り、深い河ではフェリーボートのように牛車を舟に乗せて行く。月光にきらめく水の飛沫^{しぶき}、水底^{みなぞこ}から生えた草の意外な長さ。それらは外出の解放感とあいまって、どちらも清少納言の心をときめかせた。なお、牛車は基本的に四人乗りで、前列と後列にそれぞれ二人ずつ乗った。屋形の中では進行方向に対して横向きになり、互いに向き合う姿勢をとったという。もちろんこれは一般的な場合で、実際にはいろいろである。

現代の自家用車にグレードがあるように、牛車にもグレードがあった。乗車する人物の身分によって、乗ってよい車格に決まりがあったのである。唐庇^{からび}車^{くるま}」は最も格式が高く、上皇・皇后・東宮^{とうぐう}・親王、臣下では摂関が使用する。屋形に唐破風の屋根が付いているので、遠目にもすぐわかる。一方、屋形の上部が三角屋根ではなく平らになっているものは「檳榔毛^{びんろうげ}車^{くるま}」といい、上皇や四位以上の公卿^{くけ}らが使用できた。「檳榔毛^{びんろうげ}」とは南方産のヤシ科の植物である檳榔樹の葉を細かく裂いて染めたもの^②のことで、「檳榔毛車^{びんろうげのくるま}」は車型全体がこれで作られている。同じ形で素材をグレードダウンし、竹や檜^{ひの}を組んだ網代^{あじろ}で作ったのが「網代車^{あじろのくるま}」で、五位以上の貴族に広く許されたカジュアルカーである。車種^②によってそれぞれ似つかわしい走らせ方があると、『枕草子』は言う。

檳榔毛は、のどかにやりたる。急ぎたるはわるく見ゆ。

網代は、走らせた。人の門の前^{かど}などよりわたりたるを、ふと見やるほどもなく過ぎて、供の人ばかり走るを、誰ならむと思ふこそをかしけれ。ゆるゆると久しく行くは、いとわろし。〔『枕草子』「檳榔毛は」〕

檳榔毛の車は、ゆっくり進ませるのがいい。急ぐのは素敵^{そてき}じゃない。

網代車は、走らせる方だ。人の家の門前などを通り過ぎる影が、ふと目をやるともう消えていて、供人が後を追う姿しか捉えられず「あの車、誰だろう」、そう思うくらいが格好いいのだ。ゆるゆると時間をかけて動くのは、全然だめ。

牛車の走り方一つで乗る人の心持ちすらわかると言わんばかりだ。高級な車は、品格にふさわしく走る速度も優雅であるべき。一方網代車は貴族たちが仕事や生活に使った日常車なので、もつたいをつけずきびきびと走ってこそ似つかわしい。とぼとぼ行くのはみすばらしいというのである。単に彼女の個人的な好み^③を記しているようにでいて、実は清少納言の見る目は鋭い。牛車を扱うのは牛飼いや車副^{くるまのふ}と呼ばれる召使だが、現代のお抱え運転手がそうであるように、彼らは主人のことをよく見、弁^わえていた。だから牛車の走りには持ち主の状況が反映されるのである。

藤原道長は貴族として最高の権力を誇ったが、一時期は屈辱^{くつじやく}的にも、甥^{おい}で八歳も年下の伊周^{これちか}より下の地位に甘んじたことがあった。その時、車副^④が道長を叱咤激励したと『大鏡』は言う。三月^{*3} 巳日^{みのひ}、皆が河原に出て^{*4} 禊^{みそぎ}をした日のことである。伊周は高位高官の取り巻きを連れて来て、河原に幾つもの幕を張り巡らし、我が物顔で御座所としていた。そこへやって来たのが道長の牛車だった。

御車を近くやれば、「便なきこと。かくなせそ。やりのけよ」と仰せられけるを、なにがし丸^{まる}といひし御車副^{みくるまのふ}の、「何事^{なにこと}のたまふ殿にかあらむ。

かくきうしたまへれば、この殿は不運にはおはするぞかし。わぎはひや、わぎはひや」とて、いたく御車牛くろまうしを打ちて、いま少し平張のもと近くこそ、仕うまつり寄せたりけれ。「辛からうもこの男に言はれぬるかな」とぞ仰せられける。〔『大鏡』「道長」〕

車副が伊周殿の御座所すれすれに御車を進めるので、道長殿が「それでは伊周殿に無礼だぞ。やめる。もう少し遠ざけて通れ」と仰せになったところ、某丸と呼ばれた御車副は、「何事をのたまう殿様なんだい。そんなふうには遠慮なさるから、ついていないんだね。いやなこと、いやなことだ」。そう言う牛にびしと鞭むちをくれてやり、牛車をもっと幅寄せしたのだった。「こやつに手きびしくもこきおろされたことよ」と道長殿はおっしゃったとか。

「こきおろされた」と言った道長だが、「萎縮いしゆくするな、堂々と行け」と牛車を進めたこの下僕を、のちには可愛がったという。内心では車副の励ましを感じ、胸を熱くしていたに違いない。牛車には牛飼い・車副のほか、馬に乗って先導する「前駆ぜんく」の者たちもいた。『枕草子』で清少納言が「供の人ばかり走る」と供人が牛車を追う姿を見たように、供人は徒歩で牛車の後ろに付き従った。召使らは独自のネットワークを作って政界の力関係を熟知し、主人の家が華やかならば誇らしげに勤め、傾けば見限って別の家に鞍替えすることもあった。彼らが都大路で牛車を操り行く様子は、時の政界を如実に反映した光景だったのである。

（山本淳子『古典モノ語り』一部改変）

（注） * 1 中宮……平安時代の皇后、定子ていしのこと。清少納言は女房（女官）として定子に仕えた。

* 2 菖蒲、菰……水辺に生える多年草。

* 3 巳日……縁起がよいとされる吉日。

* 4 禊……川の水を浴びて身を清める行事。

問一 傍線部①「牛車から見る風景には心躍るものがあつた」とあるが、傍線部のあとにつづく 古文1・古文2 から、実際に「牛車から見る風景」を表している部分を 古文1 は十九字で、 古文2 は十三字で探し、それぞれ最初の五字を抜き出して答えよ。

問二 傍線部②「車種によってそれぞれ似つかわしい走らせ方がある」とあるが、「似つかわしい走らせ方」として当てはまらないものを次から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 「檳榔毛車」は高級な素材で作られた車型を持っており、ゆったり優雅に走らせるのがよい。
- イ 「網代車」は貴族が日常に用いるカジュアルカーで、お供が後を追いかける姿を見るのがよい。
- ウ 「唐庇車」は位の高い貴族用の高級車で、もったいをつけずにきびきびと走らせるのがよい。
- エ 同じ「牛車」でも車格のグレードが高いものほど、ゆっくりと時間をかけて動かすのがよい。

問三 傍線部③「実は清少納言の見る目は鋭い」とあるが、そのように言えるのはなぜか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 牛車の種類に応じてふさわしい走り方があるだけでなく、召使いたちにも着目して主人の品格までもを見抜いていたから。
- イ 牛車には乗車する人の身分に応じてグレードがあることを見抜き、車種と身分とを正しく結びつけることができたから。
- ウ 牛車の種類によってどんな走り方がよいのかを車のグレードごとに認定し、率直な評価として言い表すことができたから。
- エ 牛車の走り方からお供の召使いの心情を推し量って、藤原道長の車副の行動を主人を激励するものと解釈していたから。

問四 傍線部④「車副が道長を叱咤激励した」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 道長が御座所に近づき過ぎないように気を遣って遠回りしようとしたのをいさめて、遠慮せず陣地すれすれに進むべきと進言したこと。
- イ 伊周が最高権力者にも構わず河原に陣を張っていたところに出くわし、主人道長の陣地を伊周の御座所すれすれに設営しようとしたこと。
- ウ 伊周の御座所近くに來た道長の牛車がすれすれに進もうとしたところを車副がす前で回避し、主人の失態となるのを未然に防いだこと。
- エ 主人の注意に耳を貸さずわざと御座所すれすれに牛車を進ませようとしたことで、伊周の権力に臆してはならないと道長に示したこと。

問五 傍線部⑤「彼らが都大路で牛車を操り行く様子は、時の政界を如実に反映した光景だった」とあるが、「時の政界を如実に反映した光景」として

適当ではないものを次から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 供人が主人の牛車を追いかけて走る一瞬を清少納言が鋭く観察した場面。
- イ 公的に牛車に乗ることができた清少納言が心ときめかせる解放的な場面。
- ウ 藤原道長が車副に命じて牛車を伊周の御座所から遠ざけて走らせた場面。
- エ 牛車のグレードに応じた屋根の装飾が遠目からもすぐ見分けられる場面。



宝仙学園高等学校共学部 理数インター